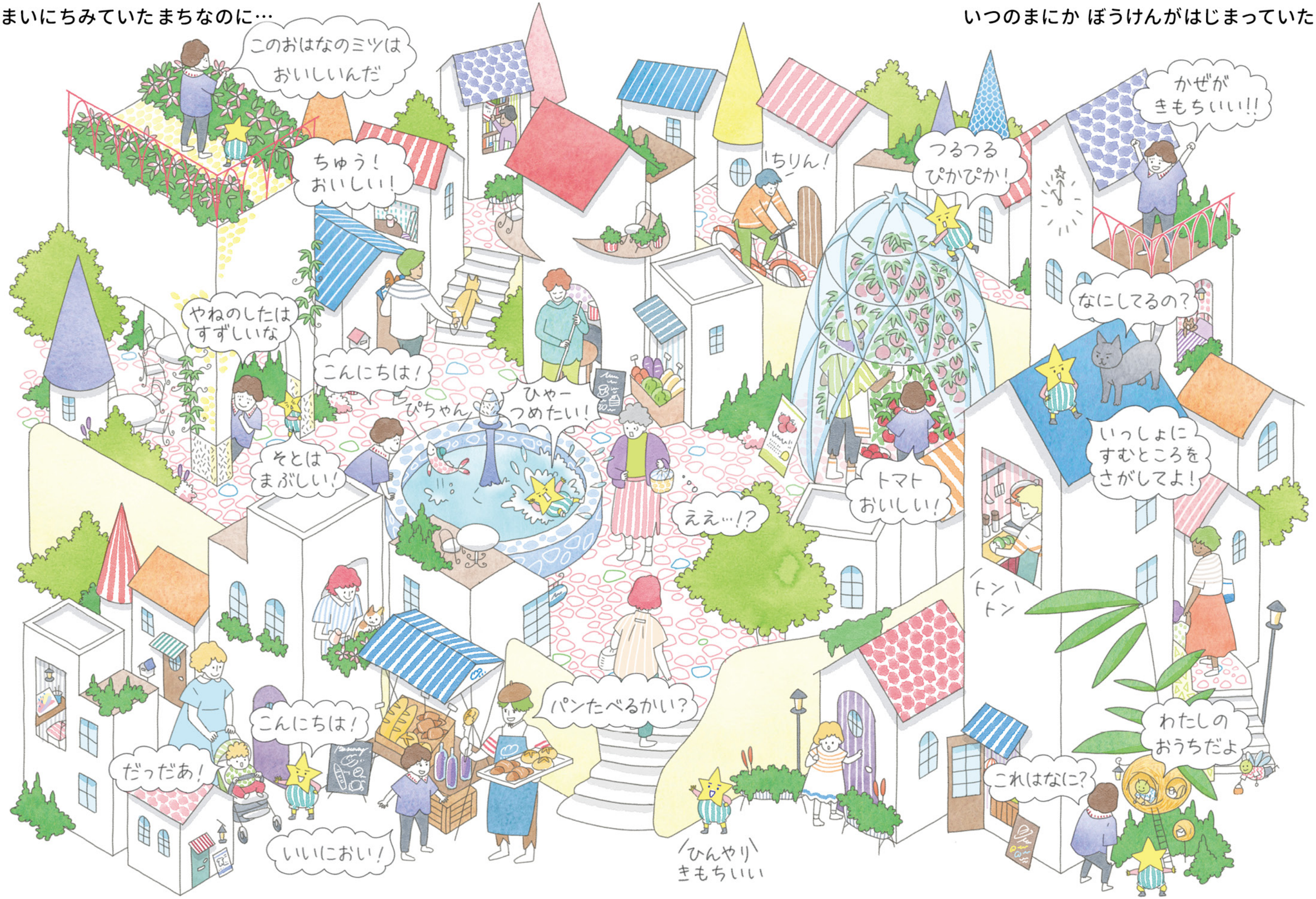
はしとぼくらがすむせかい

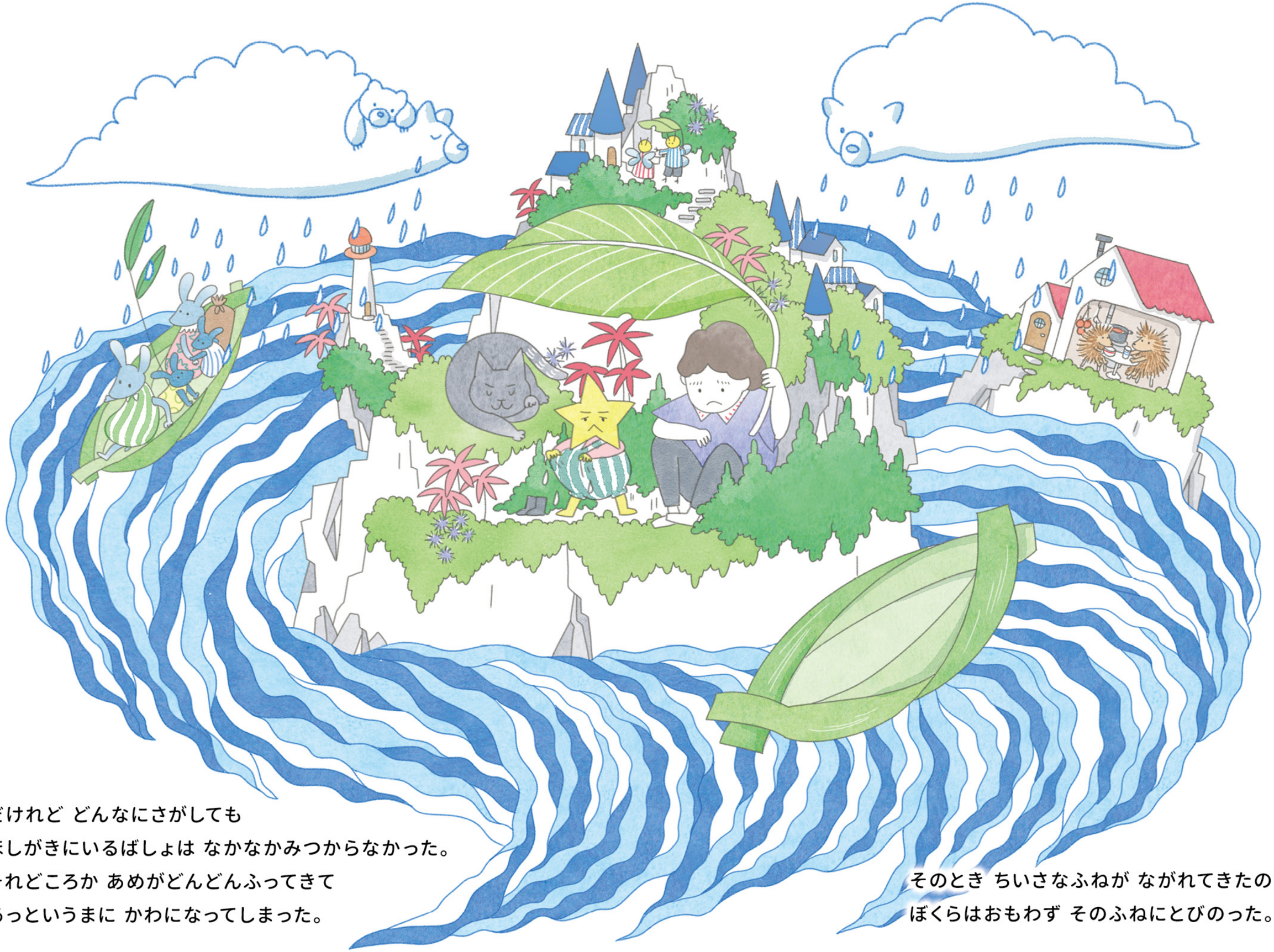
〜こどもとけんちくけんしょう〜

あるひ ぼくがまちをながめていたら
ちいさなほしが そらからおっこちてきた。
「すむところをさがしているの いっしょにさがしてくれない？」
それでぼくは ほしがすむばしょを みつけるために
まちへ でかけることになった。

ほしといっしょに まちをたんけんしていたら
まいにちみていたまちなのに…

なんだかおもしろいことがいっぱいで
いつのまにか ぼうけんがはじまっていた





だけれど どんなにさがしても
ほしがきにいるばしょは なかなかみつからなかった。
それどころか あめがどんどんふってきて
あっというまに かわになってしまった。

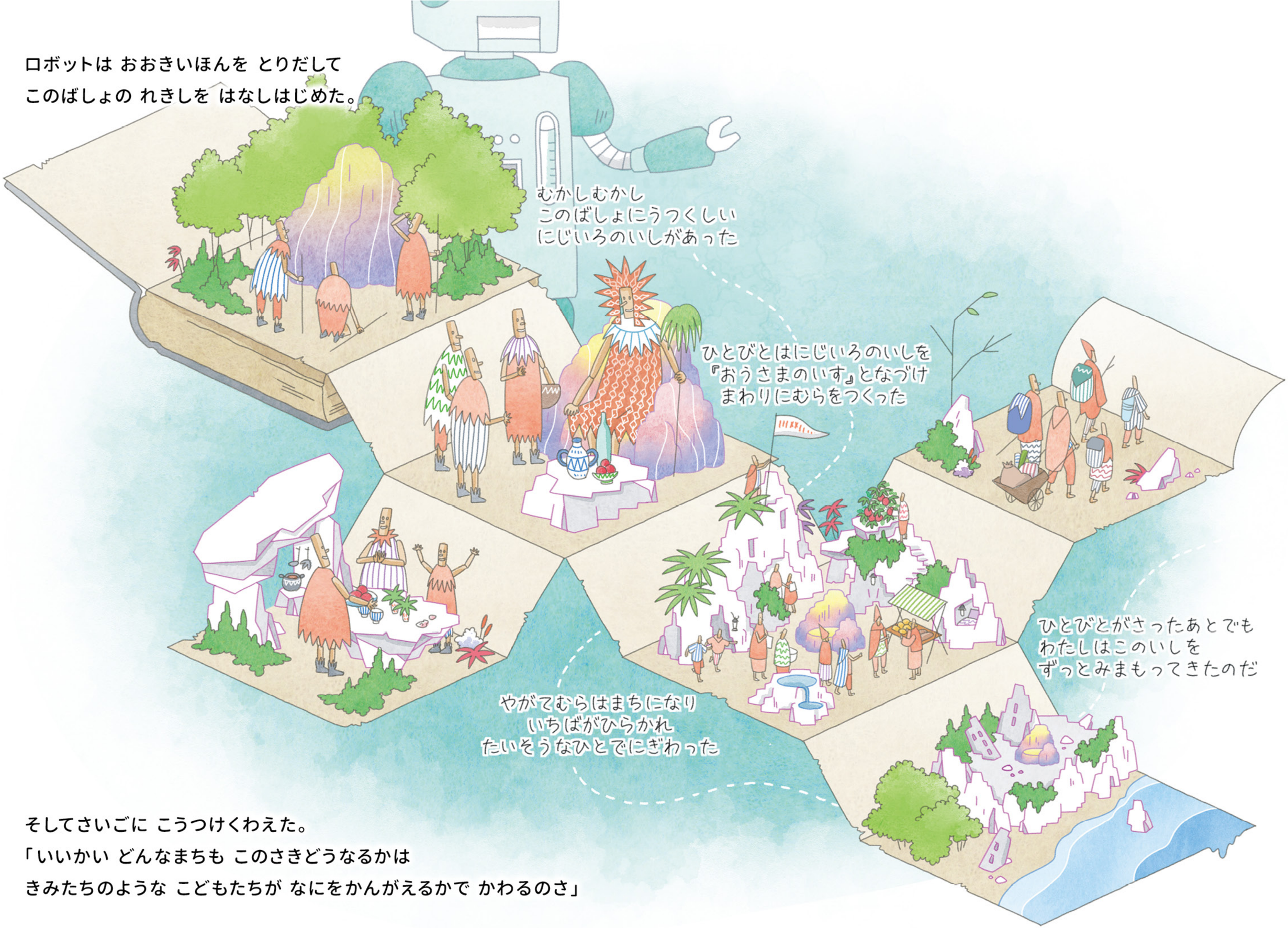
そのとき ちいさなふねが ながれてきたので
ぼくらはおもわず そのふねにとびのった。

かわはみるみるうちに うみになり
みたことない しまに たどりついた。
しまには いしがつみ上げられているだけで
だれも すんでいないみたいだった。

「ここなんかどうかな？」
そういって ぼくがきれいないしに のぼろうとしたとき
「ピピー！」
いしのかげから こわれそうなロボットが とびだしてきた。

「このいすはむかし このくにの おうさまが
おすわりになっていた いすなのだ」
ロボットは たいせつそうに いしをなでた。
「ごめんなさい。しらなかったんだ…」

ロボットは おおきいほんを とりだして
このばしょの れきしを はなしはじめた。

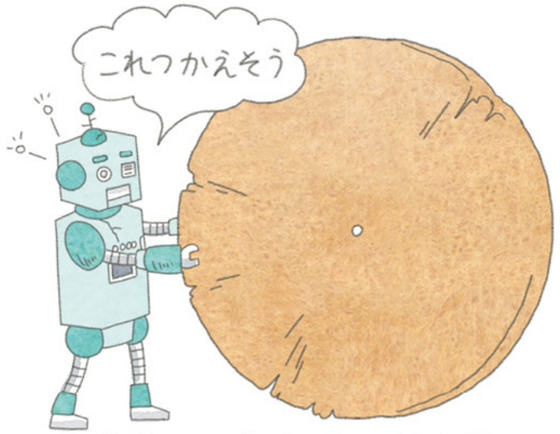


そしてさいごに こうつけくわえた。
「いいかい どんなまちも このさきどうなるかは
きみたちのような こどもたちが なにをかんがえるかで かわるのさ」

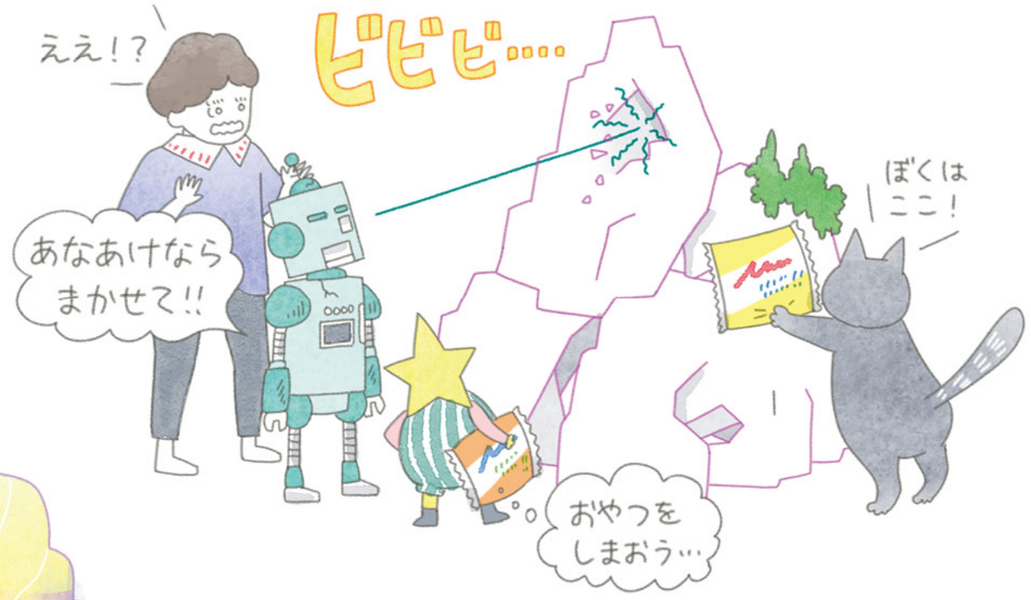
ロボットのはなしを きくうちに
たくさんのいしたちが いきいきと
まちとなって あらわれはじめた。
ほしは ないろにかがやき くるくるとまわっていった。
「すてきなばしょだったんだね！ここにすみたいな！」
「いいね！わたしも てつだうよ」とロボット。

それでぼくも ほしがすむばしょを
いっしょにつくることになった。
ぼくらは あたりをよくみてあるいてから
どんなばしょにしたいか はなしあった。

それから ざいりょうをあつめて
すむばしょをつくりはじめた。



まるい いしを みつけたり



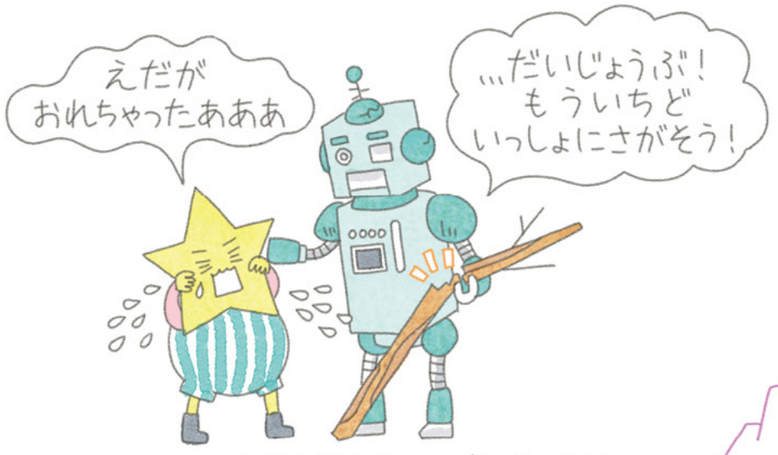
いしを つみあげたり

あなを ほったり

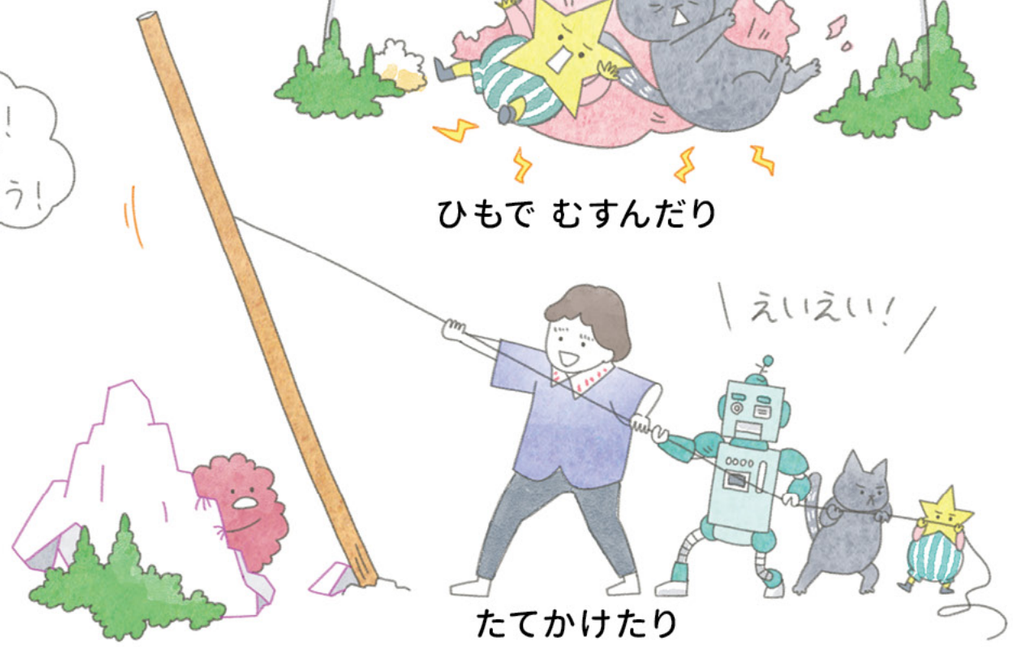
きの えだを みつけてはこび

ひもで むすんだり

あみを つるしたり



ときどき しっぱいしたり



たてかけたり

ちからをあわせて よいしょ よいしょ

きづけば なかまがたくさんになっていて
ほしのすむばしょは にぎやかにぎやか。
まるで おまつりがはじまる ひろばのよう。

ゆうひがあたたかく ぼくらのしまをてらしている。
そらには いちばんぼしが かがやいた。

しまのみんなは かぞくや ともだちを まねくじゅんびをしている。

あしたも まだまだつづきがありそう。
きみも ぼくらのほしに あそびにおいでよ。
それから きみの地球(ホシ)のことも おしえてよね。

01：みんなが住むまち、私が育つまち

家族が一緒に住む家があります。その家がたくさん集まってお互いに助け合いながら住む場所がまちです。小さな子どもからお年寄りまでが、遊んだり、学んだり、働いたりする場所があります。みんなが一緒に使う建物もあります。一緒に生活したり、お祭りをする中で、私たち一人ひとりが違うように、それぞれのまちにも特徴が生まれてきます。

02：扉を開けたら、まちは教室、まちは図鑑
出かけるたびに、図鑑のページが増えていく

建築とまちづくりの専門家クリストファー・アレグザンダーは、心地よいと感じるまちや建物の特徴を見つけ出し、『パタン・ランゲージ』という本にまとめました。キャッチーなタイトルや図を使い、心地よさの秘密を読み解く図鑑です。きみも、まちや建物を五感で感じて、自分なりの図鑑をつくってみませんか？

03：自然から人を守り、自然を取り入れる

太陽、風、雨、雪。暑さ、寒さ。時に過酷ともなるこのような自然から、建物は人を守ってくれます。一方で、建物はこれらの自然の力を取り入れてもいます。また、建物の空間は、人にちょうどいいサイズをめざして作られます。でも、ちょうどいいサイズって一体どれくらいだろう？

04：行動を誘うかたち、意味のひそむ場所

原っぱではなぜか走りたくなり、押入れは暗くて狭いけれど落ち着きます。硬い椅子では背筋が伸び、柔らかいソファーでは横になりたくなります。身近なかたち・材料・色によって知らない間に行動や気持ちが変化します。靴で上がらない、走らないなど、ルールで決められていることもありますが、その場所に隠された意味を見つける観察力を大切に。

05：柱のキズは過去から今を測るモノサシ
ケンチクの学びは、歴史や未来を覗く窓

古民家をよく見ると、暮らしにあわせて手直しして使われてきたことが分かります。また文化財の建物も、活用しながら保存する動態保存という考え方が注目されています。建築家フランク・ロイド・ライトの自由学園明日館はその一例で、校舎としての役目を終えた今も大切に使われています。歴史を知り、これからを考えることも建築の学びです。

06：きめるには　みんなの気持ちと　自分の言葉

建物やまちをつくるということは、自分の気持ちだけでなく、たくさんの協力者や、将来使い／住み／訪ねてくる人や生き物、地球の気持ちを大事に考えながら、一つ一つたくさんの何かを決めていく作業です。そのためには協力者や周りのみんなに向けて言葉で表現し、同時に意見を聞き、決める方法も一緒に考えることがとても大事。

07：未来を生きるために今あるものを奪い合うのではなく、
おたがいに協力して今ないものをつくり出す

地球上の資源にはかぎりがあります。奪い合っていたら無くなってしまいますが、新たに創造して、つくりあうことができたら、未来に素敵な贈り物を届けることができると思うのです。みんなの創造力が、未来への贈り物。

08：みんなが集まる現場は、お祭りの広場
つくるも見るも、もりあげるのも、いろんな役割があっていい

建物やまちへの関わり方は人それぞれ。お茶をいれたり、歌を歌ってもいい。子どもも大人も居場所を見つけ、自分の役割を生み出すことができる可能性を持っています。かたちやにぎわいが見えてくるとさらに協力者が集まってきます。みんな、まちの未来をつくる人。

09：私の居心地、みんなの居心地

長旅から帰って家の扉を開けたらなんだかホッとする。空間は私たちの心に直接はたらきかける力を持っているのですね。建物やまちを考える時、私や、私に直接かかわりのある人はもちろん、今ここにいない人たちへの想像力が必要です。それは、過去を生きた人、未来に生きる人々をも含みます。

10：解像度が変化する虫眼鏡
ミリの世界、住まいとまち、地球環境規模の解剖学

「God is in the details－神は細部に宿る」は、建築家ミース・ファン・デル・ローエの言葉です。建築は地球の課題につながっているよ、というメッセージと考えてみます。例えば、「建築物の木質化＝木をたくさん使おう」という取り組み。木を伐るので一見環境にやさしくないようですが、森を活かし地球温暖化対策にも有効です。

ほしとぼくらがすむところ

監修：建築と子ども勉強会

編集：小森 陽子、田口 純子

解説：伊藤 泰彦、鈴木 賢一、関口 啓介、柳澤 力、吉橋 久美子

作画：イスナデザイン

２０２３年８月発行

建築と子ども勉強会は、『UNESCO/UIA子どもと若者のための建築教育憲章』（英語原文２０１９年発行）の日本語版（２０２２年発行）を作成する過程で、子どもたちや広く多世代に憲章の内容を伝えるためにこの絵本を作成しました。公益財団法人シキシマ学術・文化振興財団の助成を受けています。